(51)立室鉱山(改訂版)

栃木県塩谷町の立室山近傍にあった「立室鉱山」について、参考文献(1)、(2)、(3)、(4)、(5)を参考にして、何回にもわたった現地探査で得られた結果について報告をする。なお、この鉱山の産出鉱種は金、銀、銅であった。が、銀が主産出品であったようである。

図2に、立室鉱山跡の探査時に、ガーミンで得られた経路曲線を示している。なを、この曲線は1回だけで得られた経路曲線ではない。何回にもわたる経路曲線を適宜切り貼りしていることに留意すること。

探査結果であるが、二号坑跡にはズリ山が豊富である。「岩力」があれば銀鉱石、自然銀を探し出すのは難しくないように思える。後掲しているが、二号坑への沢の入り口手前には、大きなホッパーらしいコンクリート廃墟もあるので、一時期は繁盛していた鉱床のように思うが。

2010年~2019年



図1 栃木県の広域地図で、立室鉱山跡を赤丸で示している塩谷町の北部の山中にある。。著者は塩谷町中心部から63号を利用している。途中の東荒川ダムの近傍には親水公園があり、そこで日本百名水に登録されている尚仁沢の湧水を無料でくみ取れる。現地を訪問する際には、大きなタンクを持参すると良い。現地への別経路として、鬼怒川沿いの藤原から63号を東行する方法もあろう。鬼怒川沿いには温泉が豊富でもある。



図2 立室鉱山探査ログ。何回にもわたった探査結果を重ね書きしていることに留意。赤丸で確認した鉱山跡を示している。黒丸の「玉生鉱山?」については、項を別にして解説する。文字Pが車の駐車場所である。塩谷町中心部から63号を北上し、そのうちに西行していく。立室山の南山麓は開拓地であった。現在でも牧場が多数点在し、見晴らしの良い高原の様相を示している。



図3 図2の部分拡大図。二号坑へ。番号1付近に駐車。大事な箇所に番号を振り、後掲の写真と対応させている。赤色は鉱山施設跡、黄緑色は坑口跡、茶色ベタはズリ跡。番号2の場所は林道脇の広い平坦な場所。資料1の鉱山図と対照して、番号3で示した坑口跡を「二号坑」と判断した。駐車場所から、歩いてこの当たりまで30分程度。



図4 図2の部分拡大図。三号坑、四号坑へ。途中まで林道は生きてはいる。そのうちにほぼ消滅。 沢を遡ることになるが、平坦で広い沢なので、何の不安もない。駐車場所から現地まで一時間弱か。 黄緑丸が坑口跡、茶色ベタがズリ跡。赤丸は鉱山施設跡らしい人工的なプラトー。



図5 図2の部分拡大図。一号坑へ。P点が駐車場所。ここからオケ沢を北上することになるが、2019年2月時点では63号から直ぐ上流で砂防ダム工事が行われていた。まだ工事中ならば、工事範囲に入り込まず、沢の右岸を大きく迂回すると良いであろう。沢はなだらかで、かつ幅が広い。不安無く遡れよう。黄緑丸が坑口跡、茶色ベタがズリらしい跡。

## 鉱山跡写真



番号1-1 この付近の道端に駐車。南方を見ている。左側の林の裾を南に下っていくと、直ぐに林道に出会う。



番号1-2 明瞭な林道に出た。ここから 道なりに進む。



番号2-1 林道直ぐ脇。ズリ山のような場所。



番号2-2 比較的長く多段のコンクリート の残骸。ホッパーであったのか?

### 二号坑へ



番号2-3 前方の沢の上流に二号坑。 沢の入り口は少し狭く、少し急であるが、 直ぐになだらかで、幅広くなっている。



写真3-1 沢の右岸にあった坑口跡。 資料1と対照して、「二号坑」と判断。



写真3-2 それに近接して入り口からの様子。 坑道は現在も確りしている。



写真3-3 坑口跡の少し上流にあった ズリ山。



写真4-1 写真中央の黒い部分が坑口跡。



写真4-2 それに近接して入り口からの様子。 入り口部分は土砂で結構埋もれているが、 坑道はしっかりしていそう。



写真4-3 坑口の少し下にあったプラト一部。 ここもズリが多そう。



写真 5 更に少し上流に登る。広いプラト一部 となっており、ズリだらけである。 資料1によれば、周りの山側に幾つか の坑口があるはずであるが、一つも 確認できず。

### 三号坑、四号坑へ



写真6-1 沢の左岸少し上部にあった 坑口跡。資料1による「三号坑」 にしては少し下流にあるが。



写真6-2 それに接近しての入り口の様子。 ほぼ埋まっている。



写真7-1 沢の左岸にあった坑口跡。 資料1の「四号坑」と判断する。



写真7-2 それに接近しての入り口の様子。 下に水が溜まっているが、坑道は奥まで立 派に生きている



写真 7-3 沢の出合の所にあった、 小さなプラトー。



写真7-4 そのプラトーに立つ。写真の中央部 に小さいズリ山。未だに草木が茂っていない。 比較用に著者のリックがおいてある。

## 一号坑へ



番号8 オケ沢への入り口。少し上流で 砂防ダム工事中(2019年3月時)。



番号9-1 写真の中央部、リックの左側に 埋もれかかっている坑口跡。



写真 9-2 坑口跡の 2010 年時の様子。 写真 9-1 と対照できる。



写真9-3 2010年時の坑口部の様子



写真 9-4 坑口跡下部にあった錆だらけの 鉄索ロープ。他の場所にもあった。

## 鉱物写真

- (1)「日本金山誌 第3編 東北」、社団法人 資源・素材学会、1992年。
- (2) インターネット上で公開されている国土地理院の地質図。
- (3)「地下資源調査報告書 第1号」、栃木県、昭和28年。 (4)「日本地方鉱床誌 関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店、昭和48年。 (5)「塩原図幅地質説明書」、岩生、今井、地質調査所、昭和30年。

資料 1 参考文献 (1) より複写掲載。丸山 (17) は本ホームページで既報である。玉生 (20) については、何度も探査を繰り返しているが、未だ痕跡さえ見つけていない。

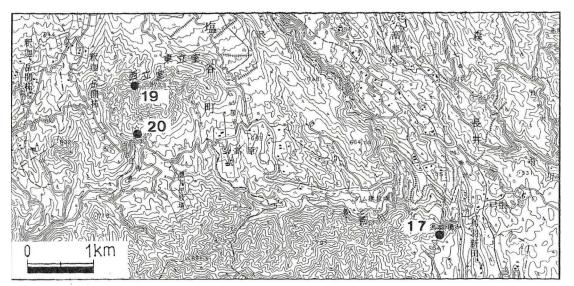


図17-1 丸山(17), 立室(19), 玉生(20), 鉱山位置図 国土地理院 5万分の1 塩原(S63)

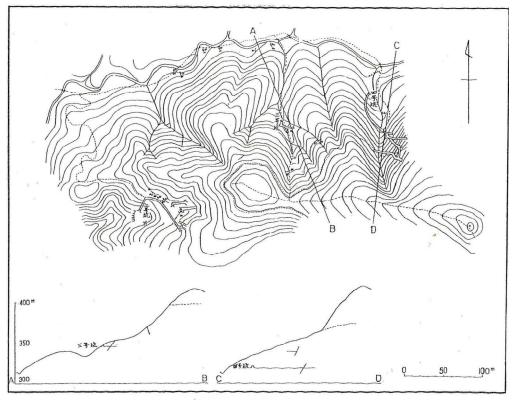
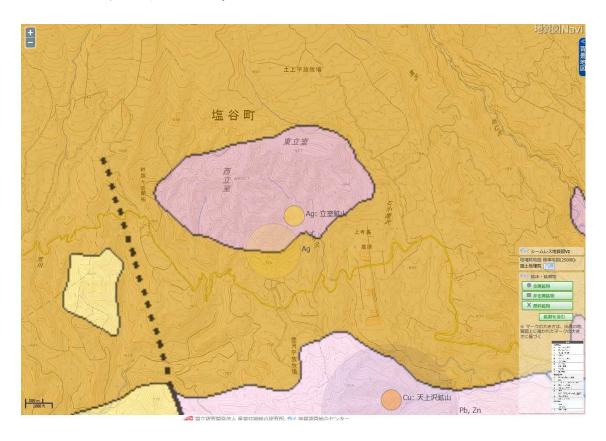


図19-1 立室鉱山坑内外関連図 (高島 清 ほか, 1955)

資料2 国土地理院のホームページより、立室山近傍の地質図。中央当たりに「Ag:立室鉱山」が 記入されている。オケ沢上流の右岸である。が、資料1に記されている西立室山の西部と北部にあっ た鉱床については、全く記述はない。



## 「玉生鉱山」について」

本玉生鉱山については、参考文献(5)が1番詳しい。他の文献の原本と思われる。この本の添付されている塩原地区の地質図中には、紹介している立室鉱山の位置は明記されているが、同じく紹介 されている塩原地区の地質図中には、紹介している立室鉱田の位置は明記されているが、同しく紹介されている玉生鉱山の位置は、何故か記入されていない。本文中には文章で位置が紹介されているが、文章で何十年前の廃鉱山の位置を確定するのは、山奥であれば、鉱山が大規模であるか、鉱山跡がそのまま残っていないと確定は非常に難しい。坑道は総延長は約1000m、坑夫50名との記述があるとすれば排出したズリは多量であったはず、坑夫用半場も大規模であったろう。資料1で示しているように、参考文献(1)には「玉生鉱山」の位置が明記されていた。63号の道路脇である。丸山鉱山(17)、立室鉱山(19)の位置は、ほぼこの位置図通りであったので、これを根拠に「玉生鉱山」の探査を何度も行った。その経路ログの一部が図2中で黒輪で示して箇所である。が、その一帯でまずに何の飲山跡により、痕跡を確認できていない。

である。が、その一帯で未だに何の鉱山跡らしい痕跡を確認できていない。

(51) 立室 (たてむろ) 鉱山跡

栃木県塩谷地区にある。 参考文献(1)によれば、「栃木県塩谷郡塩谷町にあり、玉生鉱山の東北 に隣接する。地質は玉生鉱山と全く同じ(鉱脈は大部分花崗岩中に存在するが、一部は石英斑岩中に

に隣接する。地質は玉生鉱山と全く同じ(鉱脈は大部分花崗岩中に存在するが、一部は石英斑岩中にもある。鉱石は黄鉄鉱、黄銅鉱、閃亜鉛鉱、輝銀鉱、濃紅銀鉱などを含む。銀の品位が高い)・・・鉱石も玉生鉱山とほぼ同じであるが、少量の方鉛鉱、時に自然銀を伴っている」
玉生地区から、上寺島を目指して、道路を北上していく。地形図中のオケ沢のところで駐車できる。オケ沢を沢に沿って遡上していく。道があったり無かったりである。沢を登っていこう。途中沢の右側に取水用の黒いホースが見えてくる。これを目印にして進むのも良い。地形図中の赤丸当りに達すると、沢の前方に、取水用のコンクリート箱が見えてくる。この箇所の沢の左斜面を鉱山跡と判断した。ズリらしい斜面である。登っていくと、埋もれかけている坑口がある。緑丸の当りである。ズリらしいところで標本の採集を試みたが、めぼしいものは全く見つけられなかった。ただ、1 cm四方の薄い孔雀石がこびり付いたものを1 個だけ見つけた 銅鉱石けありそうである

m四方の薄い孔雀石がこびり付いたものを1個だけ見つけた。銅鉱石はありそうである。



赤丸の箇所が鉱山跡、ズリらしい斜面がある。緑丸は坑口。

地図 国土地理院2万5千分の1地形図「高原山」

2010年3月、その他の日 探査日

参考文献

(1)「日本地方鉱床誌 関東地方」、今井、河井、宮沢、朝倉書店、1973年。

この鉱山の位置は、古い地質図を参照して、現在の地形図で探し出した。地質図にはハンマー を2つクロスさせた鉱山記号と、その近傍に、その鉱山名が表記されている。多分、鉱山記号の位置が、鉱山の位置であろう。が、坑口の位置なのか? 鉱山施設の位置なのか? 近傍に多数の坑口が あるときはどうなのか? 長い坑道の場合はどうなのか?本当に正確な位置に記号が記入されている のか? 等々の不確定要素による不安がつきまとう。が、その当りであることには、間違いはないだ ろうとして、本鉱山跡だけではなく、他の旧鉱山の探査を行っている。坑口、ズリ、施設跡が有れば、 確実に鉱山跡と判断できる。が、そうでない場合も少なくない。本探査記には、そのような不確定要 素がある。おいおいと正確な探査記にしていくつもりではある。

不十分な予備知識での探査が殆どであり、空回りする場合が多いが、場所の特定と代表標本を採集 できたときのうれしさは格別である。

# 鉱山跡写真



オソ沢への入り口。少し先までは林道を 進めるが、直ぐに沢を進むことになる。が、 軽快な沢登りである。



前方の左側斜面当りが、地形図の赤丸。



左斜面を沢から見上げる。なを、撮影日 が異なっている



斜面を数十m登っていくと、坑口がある。 写真中央の当りにある。

**採集鉱物写真** 坑口跡があるので、立室鉱山跡と考えている。が、現地ではズリらしいのがあるのであるが、めぼ しい標本は全く採集できなかった。次回以降に期待したい。